



Title	「幸運」及び「不運」の持続性を探る
Author(s)	村上, 幸史
Citation	対人社会心理学研究. 2003, 3, p. 47-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6638
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「幸運」及び「不運」の持続性を探る¹⁾

村上 幸史(大阪大学大学院人間科学研究科)

「ツキ」は、原因帰属の不明な要因としてではなく、快感情を伴って一定の期間持続するような、特定の状態を指すものとして説明されることがある。状態としての「ツキ」は、実際に「幸運」な事象が生じた場合に用いられるが、連続して「幸運」な事象が生じることとは必ずしも同等と捉えられていない点がしばしば指摘されている。そこで、この「ツキ」の持続感を喚起する要因を探るために、「幸運」な事象を想起してもらい、特定の種類の事象と「ツキ」の持続感の関連性を検討した。またこれと比較するために、「不運」な事象と不快感を伴う「不運感情」との関連性も同時に検討した。その結果、「不運感情」は「幸運感情」よりも持続感が長く、またどちらにおいても、対人的な事象を想起した場合に持続感が長いと判断されていることが分かった。最後に、この結果は占いに関する研究と絡めて論議がなされた。

キーワード: 「ツキ」、持続感、「幸運事象」、占い

「俺が今、待ち望んでいるものはたった一つだ。ツキの風が俺の方に向いてくるきっかけさ。一生ツキ続ける男はいない。一生ツカない男も居ない。誰にだって風の替わり目はある。」(色川, 1979)

問題

状態としての「ツキ」を想起する

「ツイていた」と説明される現象がある。国語辞典によれば、「ツキ」は「付き」や「附き」とも記されており、人智を越える力を得たことを示す表現として用いられることもある。

この「ツイていた」という説明は、生じた結果に対する原因の説明でもあり、過去の「ツイていた」状態の説明とも取れる。前者の場合には、なぜ「ツキ」が原因だと思うのが問題の中心になる。これについては、原因帰属や帰属と感情との関わりを中心として、知見が積み重ねられている(e.g., Heider, 1958; Weiner, 1974)。

しかし、本研究で焦点を当てるのは、後者の説明される状態そのものである。この場合には、「ツキ」はかたまりのような単一の現象として、ゲシュタルト的に語られており、場合によっては時間的な幅を持って持続する特殊な状態として捉えられることがある(筆者は「フレーム化」と呼んでいる。村上(2001)参照)。

本研究では、主観的な「ツキ」の持続感に焦点を当てる。「ツキ」の持続感とは、ある期間連続する状態として、続いた(あるいは続いているように)と捉えることを指す。この持続感の時間的な幅を問題にするために、本研究では想起された持続感を対象にする。この想起されたものは、「ツキ」に対する個人の態度の枠組みを反映したものであると考えられる。

持続感の原因は快感情?

この持続感を喚起する要因として、何が挙げられるだろうか。

まずは実際にポジティブな結果が連続して得られた場

合が挙げられる。この場合には gambler's fallacy や「少数の法則」(Tversky & Kahneman, 1971)のように、事象間の独立性が誤って認知される現象が含まれる。先に生じた無関連な結果を元にして、後の結果を予測する側面から、認知的なバイアスの一つとして説明されている。

また、主観的な自信や統制感が高まる状態がある。Langer (1975) の指摘する統制の錯誤 (illusion of control) はこれに該当する。成功した後には自信が高まったり、「運」そのものを統制することは不可能でも、「幸運」の流れ (streak) を認知した場合には、統制感が高い状態であるように捉えられる。また、迷信行動のような、ある種の積極的な行動の機能として「運」を操作しようとしたり (Henslin, 1967; Langer, 1983)、「幸運」の流れを待つ意識 (Gaboury & Ladouceur, 1989; Walker, 1992) など、このような状態はギャンブラーの視点を中心に指摘されている。

さらに、先に述べた事象間の独立性判断における誤りには、自信や統制感が高まったため、次に起こる結果が成功するかのように予測される場合も含まれる。

実際に結果が生じた後で、その結果があたかも予期できたかのように説明される現象は、後知恵バイアス (hind sight bias) と呼ばれ、認知の歪みとされるが、「ツイている」と認知された状態下では、コメントを書かせた場合に、結果を予測する要因に関する内容が増えるという知見が得られている(村上, 2001)。根拠のない予感や手応えなどからは、自己の特殊な「ツキ」という状態に視点が向いていると考えられる。

以上のことから、結果そのものよりも、むしろ結果を元に生じた感情が持続感を喚起する場合に、「ツイている」と認知されることが多いのではないかと推測される。例えば Gilovich, Vallone, & Tversky (1985) が示した、バスケットボールのシュートが "hot hand" で説明される現象のように、成功しなくても「成功しそう」に見えたり、少なくとも不

確実な事象で成功に近い状態にあったという快感情の想起が「ツキ」の持続感には関与していると考えられる(このことは Miyoshi (2000) も指摘している)。

Langer らの結果からは、統制感が持続する状態を認知することで、快感情が喚起されると考えられることから、この意味で「ツキ」も一種の感情の認知とも説明できる。また「ツキ」自体の認知(cognitive feeling)と快感情(affective feeling)の成分に分ければ、Schwarz&Clore (1996) の指摘する feeling の一種として捉えることも可能である。

以上のことから、不確実な事象で得た、結果の連続性そのものよりも、快感情を伴って「ツキが持続する」と捉えるような、状態としての持続感に焦点を当てる必要があると考えられる。

事象の想起と持続感

しかしながら、後になって「ツキ」の持続感を想起する場合には、同時に想起されると考えられる事象の内容や数がどのような影響を持つのだろうか。

「幸運」や「不運」な事象に限らず、どのような事象内容が想起されるかを考えると、Waldfoegel (1948) は回答者自身のエピソード記憶を想起させた場合に、5:3:2 の割合でポジティブな内容が、ニュートラル及びネガティブな内容よりも多く想起されやすいことを示している。

しかし Taylor (1991) が適応の側面から指摘するように、ネガティブな記憶の方が価値が高いために、インパクトが強い可能性がある。例えば、吉川(1989)は他者の悪い印象は覆されにくいことを示しており、対人的な事象に関するネガティブな記憶の重要性は高いのではないかと考えられる。

そこで事象の内容に目を向けると、Wagenaar (1994) は内容の自己関与による再生率に違いがあり、ポジティブな事象の再生には自己関与の強弱による差はないものの、自己関与が低いネガティブな事象は再生率が低いことを示している。これは内容のポジティブ - ネガティブといった方向性よりも、事象への自己関与が想起に関連していることを示している結果である。

ただし、以上は一般的な事象を想起した場合の見知である。「ツキ」の持続感と関連して想起される事象に、そのまま当てはめる訳にはいかない。また、自己関与の高い事象は想起されやすいとしても、「ツキ」の持続感を喚起しやすいのかどうかは改めて検討する必要があるだろう。というのは、自己関与の高い事象は喚起される感情が強いために、想起した事象の量とは別に、持続感を高める可能性が考えられるからである。

仮に、この説が正しいとすれば、「ツキ」が持続感を持つ理由が、想起した事象の量とは全く無関係とは言えないが、James (1890) 流の、回顧された体感時間は記憶との関数関係にあるという指摘を、想起した事象数についてはその

まま当てはめて説明できないことを示すものである。

本研究の着眼点

以上から本研究では事象の種類、とりわけ「幸運事象」に着目して、想起される「ツキ」の持続感との関連性の検討を行う。そこで、特定の種類の「幸運」な事象が想起された場合に、「ツキ」の持続感が喚起されるのかどうかを調べるために、「ツイていた」期間とその期間に生じた「幸運事象」を想起してもらい、また「ツイていなかった」期間と「不運事象」を同様に想起してもらい、これと比較する。

方法

回答者 和歌山及び大阪の看護学生・短大生 275 名(年齢は測定していない)。分析には男性 5 名を除いた 270 名分のデータを用いた。

手続き まず回答者には、最近「ツイている」及び「ツイていない」と感じた経験があったかどうかを尋ねた。さらに、その期間が最も長く続いたと感じた、主観的な期間の長さを尋ねた(以下、この期間を「幸運感情」及び「不運感情」の持続感と呼ぶ)。

期間の長さは、以下のカテゴリー(0. いいこと(良くないこと)があったその瞬間だけ、1. 1 日未満、2. 1 日～3 日未満、3. 3 日～1 週間未満、4. 1 週間～2 週間未満、5. 2 週間～1 ヶ月未満、6. 1 ヶ月以上)から最も近いものを選択してもらった。

さらに、それぞれの期間に生じた「ツイている」及び「ツイていない」経験(以下「幸運事象」及び「不運事象」と呼ぶ)の内容を具体的に記述してもらった。記述のスタイルは自由記述による複数回答である。

記述してもらった経験は KJ 法を用いて分類した。分類は筆者が行い、研究の目的を知らない社会心理学専攻の大学院生が確認を行った(最終的なカテゴリー内容は、以下の Table 1 及び Table 2 参照)。

結果

記述の数と「ツキ」の持続感

回答者に記述された事象数(のべ数、回答者平均)は、「幸運事象」が 1.69 ($SD=1.22$)、「不運事象」は 1.59 ($SD=1.19$) であり、これらの個数に差は見られなかった。

Figure1 には、「幸運感情」及び「不運感情」の持続期間の分布を示した。両者ともに瞬間的なことだったという回答が最頻値であったが、この回答が「幸運感情」には特に多く(44.7%)、持続感が短い者が多いことが分かる。ただし、これが今回測定したデータによるものか、「ツキが持続する」という信念を反映したものは判断できない。

この期間の長さを比較するために、両方の感情を報告した者(217 名)について、サインランクテストを行った。その結果、回答者は「幸運感情」よりも「不運感情」の持続期間

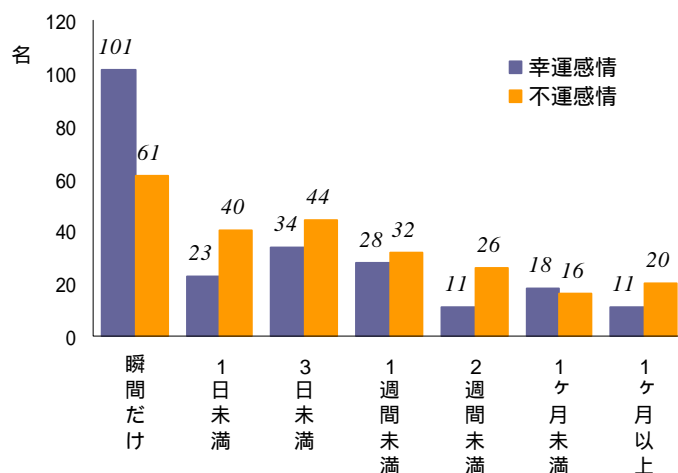


Figure 1 「幸運感情」「不運感情」の持続期間

が長いと判断していることが分かった ($z=3.52$; $p<.001$)。

回答者が想起した記述数と、この「幸運感情」及び「不運感情」の持続期間の関連性は小さかった(「幸運事象」と「幸運感情」: $r=.01$ 、'不運事象'と'不運感情': $r=.02$ 、ケンドールの順位相関による)。このことから、想起された事象の数よりも内容の方が、「幸運感情」や「不運感情」に関連しているのではないかと考えられる。

事象の種類と持続感

Table 1 及び Table 2 には「幸運事象」と「不運事象」について、それぞれのカテゴリー別に記述数を頻度順に示した。また Figure 2 及び Figure 3 は、のべ人数を回答者数と見立てて、「幸運感情」「不運感情」それぞれの期間順に事象のカテゴリーを並べたものである(ただし記述数が10未満のカテゴリーは除いた)。左側に示した項目は、いわゆる「恋愛運」・「対人運」・「金運」といった、一般雑誌の占いで個別に挙げられる項目の値を参考として示した。とりわけ「恋愛運」や「対人運」は、女性誌の占いに記されている頻度が高い項目である(村上, 1998)。

この結果からは、対人的な経験を想起した場合には、「ツキ」の持続感が高まり、持続した期間が長いと判断される可能性があると考えられる。そこで「恋愛運」や「対人運」に含まれる項目(Table 3 及び Table 4 参照)を合わせて対人的な項目とした。対人的な項目が全体に占める割合は、「幸運事象」では 34.6%、「不運事象」では 26.9%であった。

これらの経験が持続感に与える影響を探るために、対人的な項目の有無を独立変数、「幸運感情」及び「不運感情」の期間を従属変数として、U 検定を行った。その結果、いずれも対人的な項目を含む者の方が、持続期間が長いと判断していることが示された(「幸運感情」: $z=3.17$; 「不運感情」: $z=2.52$, ともに $p<.01$)。

なお「健康である」など、もともと状態を示すと考えられる記述(Table 1 及び Table 2 参照)を行った者は、持続期間が長いと判断していた(「幸運感情」: $z=4.26$; 「不運感情」: $z=3.71$, ともに $p<.001$)。

状態を示すと考えられる記述が、全体に占める割合は「幸運事象」の 16.9%に対して、「不運事象」では 22.2%と 5%程度多かった。しかしながら、この記述を想起しなかった者(95 名)でも、「幸運感情」よりも「不運感情」の持続期間が長いと判断しており($z=2.80$, $p<.01$)、「不運感情」が持続しやすいと感じる理由は、状態を認知する経験の想起数である可能性は小さいと考えられる。

Table 3 及び Table 4 には、状態を示すか否かに関わらず、記述を事象内容によって一つにまとめ、記述数順に並べて示した。事象内容の全体的な特徴として、「運」にまつわる事象では、金銭的な内容や他者からの援助など即物的に得たものに対する記述が多く見られたことが挙げられる。とりわけ「幸運事象」の 30.0%を占めるなど、その傾向は「幸運事象」に強く見られた。またネガティブな結果の回避(「幸運事象」)やポジティブな結果を逃した(「不運事象」という「得なかった」観点からの記述は、あまり見られなかった。

「幸運事象」と「不運事象」の記述数やカテゴリーを比較すると、対人接触に関する記述や、回答者があらかじめ持っていた期待にまつわる記述は両方に多いが、「不運事象」には、ミスやタイミングのズレに含まれる記述が多いことが分かった。

「幸運事象」と「不運事象」の両者に言えることだが、いわゆる対人的な項目は、記述個数が特に多い訳ではなく、神谷(1997)が指摘するように、日常的な個人的なエピソードには、何らかの個人的な感情が付着しているため、対人的な事象の結果によって生じる感情が持続しやすく、

Table 1 「幸運事象」のカテゴリー

No	カテゴリー名	n	サブカテゴリー名	
1	知り合いと接触する機会があった	35	知り合いに会う機会があった 予想外の出会い 電話をもらった	対人運
2	友人とのつき合いがうまくいっている	29	知り合いと会う予定がある 友人との関係	対人運
3	恋愛が発展しそうな出来事があった	21	恋愛が上手くいきそうな出来事 大切な人と話し合うきっかけ	恋愛運
3a	恋人とのつき合いがうまくいっている	11	恋人ができた 恋人との関係が良い	恋愛運
4	知り合いが好意的な態度	4	家族も応援してくれることになった 人にほめられた	対人運
4a	知り合いが好意的である	5	人が優しい	対人運
5	他者が物質的な援助をしてくれた	48	おごってもらった 物もらった 物を買ってもらった 物を借りた	
6	自分のミスがなくなった	14	悪いことをしてもおとがめなし 失敗が帳消しになった	
7	予期せぬモノを入手した	19	コンサートのチケットが取れた クジが当たった テレカを拾った なくした物を見つけた	
8	金銭的な満足感を得た	78	臨時収入があった 予想以上の収入があった 安く買い物ができた 給料日が早まった 買い物でギリギリお金が足りた お金を拾った	金運
8a	金銭的な満足感がある	7	金回りがいい 援助してもらっている	金運
9	望みが叶った	30	いい物を見つけた バイトが休めた 目標が叶った	
10	環境に恵まれていると感じる	9	いい日々を過ごしている 迷惑な対象がいらない	

No	カテゴリー名	n	サブカテゴリー名
11	勝負事で勝った	8	ギャンブルで勝った ジャンケンで勝った
12	いい物を鑑賞できた	3	いい物を鑑賞できた
13	タイミングが良かった	18	交通がスムーズ 通学バスで座れた 友人と帰る時間が一致した レポートを完成・提出できた CMを見れた
14	ささいな達成感を得た	3	ゴミ箱にゴミ バイクのエンジンが一発でかかった 雑誌に載った
15	身体的な変化	1	やせた
16	時間に間に合った	13	予定時刻に間に合った 賞味期限に気づいた
17	天気が良い	18	天気が良い
18	占いで1位	1	占いで1位
19	例外的に間に合った	7	野球の延長でTVが見れた 電車が事故で遅れて間に合った
20	好きな人の活動	2	好きな人の活動
21	悩みが解決した	1	やりたいことが分かった
22	残り物に福	8	残り物に福
23	いい時間を過ごせた	21	勉強がはかどった 物事がはかどった 楽しく過ごせた
24	仕事に恵まれている	10	仕事の機会を得た
25	おまけ・付加	3	サービス
26	事故に遭わなかった	1	事故に遭わなかった
27	めぐり合わせが良かった	15	いい店や物に遭遇 教官が優しい先生 コンサートの席が前 いい本に巡りあえた
28	コンサートのチケットが来た	1	コンサートのチケットが来た

カテゴリーの網掛け部は状態を示す記述、右はFigure2における分類を示す

Table 2 「不運事象」のカテゴリー

No	カテゴリー名	n	サブカテゴリー名	
0	他者の意図的な行為が不快	8	自分の責任にされた 残り物を食べさせられた 注文と違う髪型に 自分の物を盗まれた・変な行為をされた	対人運
0b	他者の悪気のない行為が不快	12	自分の物をなくされた・壊された 迷惑行為をされた 他者のせいで失敗しかけた	対人運
1	相手と接触できなかった	21	知り合いに会う機会が減った すれ違いで会えなかった 予定がバッティング	対人運
1a	相手と接触できない	4	電話が通じない	対人運
1b	不快な接触があった	5	遭いたくない出会い 都合の悪い対象がいた 嫌いな人から電話	
2	対人関係でのトラブル	16	対人関係でのトラブル	対人運
2a	対人関係が気まずい	18	関係が気まずい	対人運
3	恋愛に関する不満な事象	12	恋人に振られた・別れた 好きな人とのトラブル	恋愛運
3a	恋愛に関する不満が解消しない	4	恋愛がうまくいかない	恋愛運
4	他者に責められた	20	他者に責められた・怒られた 名指しでミスを公表された	対人運
6	ミスをした	34	落とし物・無くし物をした 忘れ物をした 見間違い・乗り間違い 寝坊した お釣りをもらい忘れた テストを忘れていた いつもはしない失敗をした 一つの失敗から全てつまづいた	
8	出費	2	他者のための出費 高い買い物をした	金運
8a	金銭的な欠乏感がある	10	お金がない 収入のあてがない	金運
8b	必要なときにお金がなかった	9	必要なときにお金がなかった	金運
9	希望するモノを手に入れられず	20	いい買い物ができなかった 求めていたものを逃した 予約が取れなかった クジ・懸賞に外れた 食べたいものが食べれず	
9a	融通が効かない	11	仕事の融通が効かない 時間がもっと欲しい	

No	カテゴリー名	n	サブカテゴリー名	
9b	思い通りにいかない	10	試験に落ちた ゴミ箱にゴミが入らず 思い通りにいかない 何をやってもうまくいかない	
10	不安事項が解決しない	5	物が見つからない 物の調子が悪い お金が返ってこない 注文の品が届かない	
11	勝負事で負けた	10	ジャンブルで負けた ジャンケンで負けた	
13	タイミングのズレ	44	交通 満員電車 失敗を見られた 約束の2日前に風邪 店が休み	
14	自分の行為が裏目な結果になった	3	親切が裏目に やったことが裏目に	
15	身体的な問題が発生した	6	身体的変化 パーマが取れてきている	
16	時間に間に合わず	6	遅刻した TV番組を見逃した	
17	天気が良くない	28	天気が良くない	
21	精神的な問題	1	一人になりたい 心配事が増えた	
23	時間を無駄に過ごした	6	時間を無駄に過ごした	
24	仕事がない	2	仕事がない	
26	事故	14	事故	
27	めぐり合わせが悪かった	1	試験官のめぐりあわせ	
29	体調が悪い	15	体調が悪い	
30	ケガした	8	ケガした	
31	過去の選択を後悔している	2	過去の選択を後悔している	
32	イヤな割り当てが回ってきた	6	嫌な仕事 that 回ってきた 先生に指名されている	
33	悔しい思いをした	1	悔しい思いをした	
34	物が壊れた	13	物が壊れた	
35	時間切れに気づいた	7	時間切れに気づいた	
36	人にぶつかりそうになった	1	人にぶつかりそうになった	
37	必要な物が足りなかった	1	必要な物が足りなかった	
38	悪事がばれた	6	悪事がばれた	
39	仕事や勉強での停滞	36	勉強が大変 仕事 that うまくいかない	
40	嫌な動物の行為	2	嫌な動物の行為	

カテゴリーの網掛け部は状態を示す記述、右はFigure3における分類を示す

Table 3 「幸運事象」の個数

No		n
8	金銭的な満足感を得た / がある	85
8a		
5	他者が物質的な援助をしてくれた	48
1	知り合いと接触する機会があった	35
3	恋愛が発展しそうな出来事があった	
3a	/ つき合いがうまくいっている	32
9	望みが叶った	30
2	友人とのつき合いがうまくいっている	29
23	いい時間を過ごせた	21
7	予期せぬモノを入手した	19
13	タイミングが良かった	18
17	天気が良い	18
27	めぐり合わせが良かった	15
6	自分のミスがなくなった	14
16	時間に間に合った	13
24	仕事に恵まれている	10
10	環境に恵まれていると感じる	9
4a	知り合いが好意的な態度	9
4		
11	勝負事で勝った	8
22	残り物に福	8
19	例外的に間に合った	7
12	いい物を鑑賞できた	3
14	ささいな達成感を得た	3
25	おまけ・付加	3
20	好きな人の活動	2
15	身体的な変化	1
18	占いで1位	1
21	悩みが解決した	1
26	事故に遭わなかった	1
28	コンサートのチケットが来た	1



Figure 3 「不運事象」の種類と持続感

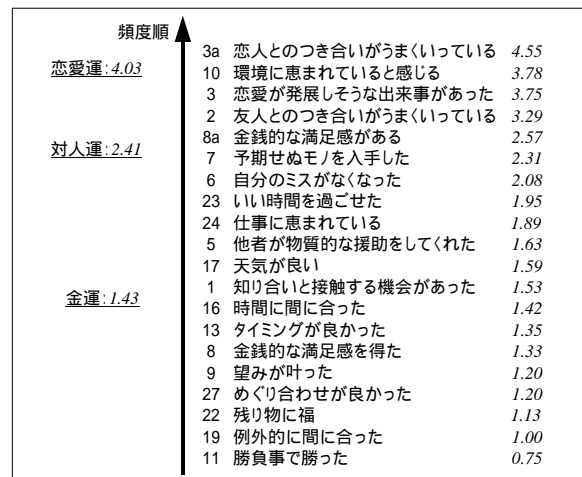


Figure 2 「幸運事象」の種類と持続感

Table 4 「不運事象」の個数

No		n
8b		
8a	必要なお金になかった / 金銭的な欠乏感がある / 出費	48
8		
13	タイミングのズレ	44
1	相手と接触できなかった	
1b	/ 不快な接触があった	42
1a	/ 相手と接触できない	
39	仕事や勉強での停滞	37
6	ミスをした	34
17	天気が良くない	27
3	恋愛に関する不満な事象	
3a	恋愛に関する不満が解消しない	22
2		
2a	対人関係でのトラブル / が気まずい	20
4	他者に責められた	20
9	希望するモノを手に入れられず	20
0b	他者の悪気のない行為が不快	19
0	/ 意図的な行為が不快	
9b	思い通りにいかない	19
9a	/ 時間の融通が利かない	
29	体調が悪い	15
26	事故	14
34	物が壊れた	13
11	勝負事で負けた	10
30	ケガした	8
35	時間切れに気づいた	7
15	身体的な問題が発生した	6
16	時間に間に合わず	6
23	時間を無駄に過ごした	6
32	イヤな割り当てが回ってきた	6
38	悪事がばれた	6
10	不安事項が解決しない	5
14	自分の行為が裏目な結果になった	3
21	精神的な問題	2
24	仕事がない	2
31	過去の選択を後悔している	2
40	嫌な動物の行為	2
27	めぐり合わせが悪かった	1
33	悔しい思いをした	1
36	人にぶつかりそうになった	1
37	必要な物が足りなかった	1

「幸運感情」や「不運感情」の持続感に関連している可能性が高いと推測される。

最後に、この調査の主目的は、想起した「ツキ」の持続感、つまり「ツイていた」ことや「ツイていなかった」ことを測定しているが、「ツイている」「ツイていない」という状態に対する意識の有無に関するデータも、参考として測定している(5段階)。これは、回答者が主観的に現在と捉えた状態を指すと考えられるが、「ツイている」ことの意識は59.2%、「ツイていない」ことの意識については73.6%の者が肯定的な回答をしていた。

両者に回答した265名について、対応のあるt検定を用いて比較した結果、「ツイていない」ことについての意識の方が高く($t=5.65$, $p<.001$)、状態の存在についての信念、及び不運感情の持続性を裏付ける結果であると考えられる。

考察

本研究で得られた結果をまとめれば、想起した事象の種類によって持続感が異なる可能性、及び「ツイていなかった」という「不運感情」の持続感、「幸運感情」の持続感よりも長いと判断された点が挙げられる。

前者は占いの関連性からも考察可能である。一般的な雑誌の占いでは、予測できる運勢というものがあるように提示されるが、多くの運勢占いには対象期間がある。一定の期間における運勢という提示の方法からは、「一定の期間持続する傾向がある運勢」という姿が提示されている。このような運勢観を暗黙の了解として、読み手は受容していると考えられる。

さらには、運勢は種類別に分けられ(村上(2002)は「個別運」と読んでいる)、多くの女性誌の占いでは、「恋愛運」や「対人運」が提示されている。このことが、女性が恋愛や対人関係に関心が高いことを意味するとすれば、対人関係の項目は、女性にとって自我関与が高い内容であると考えられる。

対人関係の項目が想起された数が占める割合は、「幸運」や「不運」な事象の中では、最も多い項目ではなかった。しかし、対人関係の項目を想起した者は、「ツイていた」及び「ツイていなかった」持続期間を、より長いものと判断していた。この結果は、対人関係に関する「幸運」や「不運」な事象によって喚起される感情は持続しやすく、「幸運感情」や「不運感情」の持続感を高める役割を果たしていることを示していると考えられる。

また、想起された「幸運事象」と「不運事象」の個数には差がないのに対して、「不運感情」は「幸運感情」より持続する期間が長いと判断されていた。このことから、特定の「不運事象」は、喚起される感情が持続しやすいのではないかと推測される。この結果は「幸運」や「不運」という事象

においても、個人的な事象の想起には感情が付随するという神谷(1997)の指摘を支持する結果と考えられる。また、持続感には想起された事象の数よりも、共に喚起される感情の持つ効果が大きいのではないかと推測される。

事象に付随する感情の強度は、全体として時間の経過に従って低下するが、ポジティブな事象については、その低下の程度がネガティブな事象に比べて小さいことが指摘されている(Holmes, 1970)。ただし、対人的な事象にまつわる感情は低下しにくい、あるいは想起した「不運」と結びつく感情が低下しにくい可能性は考えられるだろう。

また「不運感情」と「幸運感情」の持続期間に対して見られた判断の違いは、「悪いことは続きやすい」という素朴な信念の反映であるとも考えられる。期間を尋ねた場合に、瞬間的な事象であったと回答した者が最も多かったことから、この素朴な信念と喚起される感情の持続しやすさは相反するものではない。つまり、実際に連続して生じた事象の結果の連続性ではなく、持続したものとして取り出される視点の背後にある主要因と言えるだろう。

本研究で測定した内容は、持続したという、いわばかたまりとして、後からフレーム化されて取り出されたものであるが、このような持続感は「現在の」状態としても意識されていると考えられる。想起される経験は必ずしも事実の反映ではないかもしれない。しかし、対人的な関わりを「幸運」及び「不運」として認知することは、生起する事象の量とは別に、「現在が特別な状態である」ことを意識させる役割を持つのではないかと推測される。

「幸運事象」と「不運事象」の想起数に差が見られなかったことについては、他に回答方法の問題が挙げられる。本研究では、「最も長い」という限定が付いた特定の期間において生じた事象を想起させている。この方法では、それ以外の期間における事象が記述されていない可能性が高い。

しかし、方法による差異ではなく、「ツキ」の想起に特有の現象と考えられる点もある。まず「幸運」や「不運」の定義には個人差があり、同じ事象を想起しても挙げる／挙げない両者が存在する点である。また自由想起ではなく、「ツイていた」「ツイていなかった」ことに関する事象を挙げるスタイルから、実際に生じた事象の方が想起しやすいため、「ツイていなかった」ことを主張する根拠として、量を多く挙げる必要があった可能性が考えられる。個人特性として自分の「運が弱い」と位置付ける者は、「不運」な事象を多く想起すると考えられる結果もある(村上, 2002)。「運が弱い」と認識する者は少ない訳ではなく、「運」にまつわる事象は、同等に想起されたと考えてもおかしくはない。

以下、この研究は探索的なものであり、問題点と考えられる主なものを挙げて、次の研究への橋渡しとする。

一つは主観的な持続期間と物理的な期間とのズレの問

題である。本研究では、持続期間を物理的な時間に置き換えて回答してもらった。不快な経験(蜘蛛嫌いの者が蜘蛛を凝視する)は、同等の物理的な時間を長く体感したかのように判断させるという結果(Watts & Sharrock, 1985)もあるように、同じ物理的な時間を主観的に長く判断している可能性がある。

本研究のような持続感は、あくまで主観であり、始めと終わりのような明確な指標がある訳ではないため、測定する指標として、期間の長短という基準が妥当なものであるかどうかは問題とすべき点である。ただし科学的な根拠のない占いやバイオリズムのような、周期によってポジティブ - ネガティブの方向性が変化するという説明が受け入れられていることは、「運」や「ツキ」の持続を感覚的に捉える状態を認めた上で、主観的な持続期間と物理的な期間のリンクが、ある程度納得したものとして認知されている姿として反映されていると考えられる。

二つ目は性差の問題である。本研究の分析対象は全て女性であり、占いを好むのは女性が多い点からは、結果の解釈に大きなズレはないと考えられるが、この「幸運事象」や「不運事象」の回答傾向や、持続感の長短が男性にも当てはまるとは限らない。ただし、ギャンブルを好むのは男性が多く、問題で述べたように認知的な歪みの指摘からは、「ツキ」を持続したものとして捉える現象は、性差を越えたものであると言えるだろう。

最後に、本研究では「不運感情」と「幸運感情」を独立したものとして扱ってきたが、「ツキがない」という表現からも、「不運」は「幸運」の否定である可能性もある。この場合には、単純にポジティブ - ネガティブの対称的な軸に当てはめて考えて良いかという問題が残る。

このような「ツキ」の問題については、未知の部分が多く、さらに研究を深めていく必要があると考えられる。

引用文献

- Gaboury, A. & Ladouceur, R. 1989 Erroneous Perceptions and Gambling. *Journal of Social Behavior and Personality*, 4, 411-420.
- Gilovich, T., Vallone, R. & Tversky, A. 1985 The hot hand in basketball: On the misperception of random sequences. *Cognitive Psychology*, 17, 295-314.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. Oxford: John Wiley & Sons. (大橋正夫訳 1985 対人関係の心理学 誠信書房)
- Henslin, J. M. 1967 Craps and magic. *American Journal of Sociology*, 73, 316-330.
- Holmes, D. S. 1970 Differential change in affective intensity and the forgetting of unpleasant personal

experiences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 15, 234-239.

色川武大 1979 ぼうふら漂遊記 新潮社

James, W. 1890 *The principles of psychology* (vol.1). NY: Henry Holt.

神谷俊次 1997 エピソード場面刺激による感情喚起が記憶に及ぼす影響 心理学研究, 68, 290-297.

吉川肇子 1989 悪印象は残りやすいか? 実験社会心理学研究, 29, 1, 45-54.

Langer, E. 1975 The illusion of control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 311-328.

Langer, E. 1983 *The psychology of Control*. Beverly Hills, CA: Sage.

Miyoshi, H. 2000 Is the "hot-hands" phenomenon a misperception of random events? *Japanese Psychological Research*, 42, 128-133.

村上幸史 1998 ツキの流れは占いで読む!? - 運に関する信念における占いの情報的影響 - 第 39 回日本社会心理学大会論文集, 232-233.

村上幸史 2001 ギャンブラーは「ツキ」をどのように読むか - レース後のコメント分類から探る - 対人社会心理学研究, 1, 69-79.

村上幸史 2002 「運の強さ」とその認知的背景 社会心理学研究, 18, 11-24.

Schwarz, N. & Clore, G. L. 1996 Feelings and phenomenal experiences. Higgins, E. T. & Kruglanski, A. W. (Eds.) *Social psychology: Handbook of basic principles*. NY: Guilford Press. pp. 433-465.

Taylor, S. E. 1991 Asymmetrical effects of positive and negative events: The mobilization minimization hypothesis. *Psychological Bulletin*, 110, 67-85.

Tversky, A. & Kahneman, D. 1971 Belief in the law of small numbers *Psychological Bulletin*, 76, 105-110.

Walker, M. B. 1992 *The psychology of gambling*. Elmsford, NY: Pergamon Press

Wagenaar, W. A. 1994 *Is memory self-serving?* Neisser, U. & Fivush, R. (Eds.) *The remembering self: Construction and accuracy in the self-narrative*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 191-204.

Waldfoegel, S. 1948 The frequency and affective character of childhood memories. *Psychological Monographs*, 62 (Whole no.291).

Watts, F. N. & Sharrock, R. 1985 Relationships between spider constructs in phobics. *British Journal of Medical Psychology*, 58, 149-153.

Weiner, B. 1974 *A theory of motivation and attribution theory*. Morristown, NJ: General Learning Press.

註

1) 分析に際して、本研究科大学院生の伊藤公一郎氏に協力をお願いしました。ここに感謝を申し上げます。

Research of subjective durability judgement of “luck” and “unluck”

Koshi MURAKAMI (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

“Tsuki” is sometimes explained not as a factor of unknown causal attribution, but as specific state which is maintained during a fixed period with positive feelings. Although “tsuki” considered as state is used when “lucky” events actually occur, it is pointed out that “tsuki” are not equivalent continuously occurring “lucky” events. Thus, in order to explore the factor which evokes the feeling of continuity of “tsuki”, Ss recalled “lucky” events, and then, relationship between specific kinds of events and the feeling of continuity of “lucky feeling” were examined. Moreover, in order to compare with this, relationship between “unlucky feeling” with negative feelings and “unlucky” events were also examined. Consequently, the feeling of continuity of “unlucky feeling” is judged longer than that of “lucky feeling”. And a feeling of continuity is considered as long on recalls of interpersonal events in both judgements. The results were discussed in context of fortune telling.

Keywords: “tsuki”, feeling of continuity, “lucky events”, astrology